

## 近現代の日蓮宗教学史にみる『立正安国論』注釈書の検討

矢 吹 康 英

### 一、はじめに 研究の動機

な動機は、正嘉元年（一二五七）八月二三日の深夜に鎌倉を襲った大地震であったことがうかがえる。

文応元年（一二六〇）七月一六日、日蓮聖人は得宗被官・宿屋光則を仲介として、鎌倉幕府の前執権・北条時頼に『立正安国論』を進覧された。これが、日蓮聖人の生涯における諫暁活動のはじまりである。当時の人々が正しき仏法に背き、悪法や邪法に帰依した結果、人災や天災が相次いで発生することとなった。日蓮聖人はその惨状を一刻も早く解決するために、誤った信仰を捨てて、速やかに実大乘たる『法華経』を信仰するように勧奨した行動が、『立正安国論』の進覧である。

文永六年（一二六九）に執筆された『安国論奥書』には、「去見<sup>ル</sup>正嘉元年<sup>太歳</sup>己巳八月廿三日戊亥之剋大地震<sup>ヲ</sup>勸<sup>フ</sup>之<sup>ズ</sup>」とあることから、『立正安国論』執筆の直接的

筆者は、平成二十三年（二〇一一）三月一日に発生した東日本大震災を、福島県の実家で体験した。建物が倒壊し、地面が割り裂ける状況を目前にして、『立正安国論』の冒頭の一節「旅客来嘆曰<sup>ク</sup>。自<sup>レ</sup>近年<sup>ニ</sup>至<sup>ル</sup>近日<sup>ニ</sup>天<sup>ノ</sup>変<sup>ニ</sup>地<sup>ノ</sup>天<sup>ノ</sup>飢<sup>ニ</sup>饉<sup>ニ</sup>疫<sup>ニ</sup>癘<sup>ニ</sup>。遍<sup>ク</sup>滿<sup>ク</sup>天下<sup>ニ</sup>。広<sup>ク</sup>進<sup>ク</sup>地上<sup>ニ</sup>。牛馬<sup>ノ</sup>斃<sup>レ</sup>。巷<sup>ノ</sup>骸<sup>ノ</sup>骨<sup>ノ</sup>充<sup>テ</sup>路<sup>ニ</sup>。招<sup>ク</sup>死<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>輩<sup>ニ</sup>既<sup>ニ</sup>超<sup>テ</sup>大半<sup>ニ</sup>。不<sup>レ</sup>悲<sup>シ</sup>之<sup>ノ</sup>族<sup>ヲ</sup>敢<sup>テ</sup>無<sup>ク</sup>一人<sup>ノ</sup>。」を思い浮かべた。そして日蓮聖人の国家観や災害観、あるいは正法観を学びたいとの願いに至り、『立正安国論』を中心とする研究を志した。

『立正安国論』の歴史を見るに、日蓮聖人滅後の教団史・教学史、とりわけ明治期以降においては、日蓮聖人門下の認識や理解によって、特別な「時代性」や「思想性」、さらには「規範性」を持ち、他の著述や思想と

有機的に関わり合っていると考えられる。その結果、種々様々な解釈がなされ、また多面的に利用されてきた。たとえば、近現代における事例として、大正一年（一九二一）には大正天皇から日蓮聖人に「立正大師」諡号が、また昭和六年（一九三一）には昭和天皇から「立正」勅額が降賜されたことが挙げられる。これらの出来事において、日蓮聖人門下は『立正安国論』こそが日蓮聖人の思想や教学の根幹であると意義づけ、また『立正安国論』を執筆・進覧した日蓮聖人を、「国主法従」の立場の宗教者であると位置づけた。これは、『立正安国論』を利用して、時代相応の日蓮聖人像を確立させ、同時に、社会思想の中心が国体主義であったことから、日蓮聖人遺文の代表格ともいえる『立正安国論』が読み換えられて時代相応の解釈をされたことのあらわれともいえる。

さらに『立正安国論』は、日蓮聖人の著述の「三大部」・「五大部」のひとつにもかぞえられている。日蓮聖人滅後から今日までの『立正安国論』注釈書は、『開目抄』や『観心本尊抄』等の他の遺文の注釈書と比較しても、あきらかに多く執筆されている<sup>3)</sup>。これは、日蓮聖人が『立正安国論』に説示された精神や、「諫暁」

という国家権力に立ち向かう行動、あるいは『立正安国論』の予言的側面を、門下が継承し、『立正安国論』を多面的に用いたとも考えられる。

日蓮宗教学史上、近現代の先師における『立正安国論』の受容と展開に視点をあてて、『立正安国論』の注釈書に着目し、先師の『立正安国論』に対する姿勢や視点を考察したいと考えた。日蓮聖人が、『立正安国論』を進覧したという行為（諫暁活動）の精神が、いかにして受容・継承されてきたか。あるいは、『立正安国論』に説示されている思想や教義が、いかにして展開されてきたのか。これらを、注釈書から確認するための前提作業として、本稿では先師の学恩にあずかり、今後の研究発展の第一歩となるよう目録の作成を試みたい。

## 二、日蓮聖人遺文にみる『立正安国論』に関する記述

近現代における『立正安国論』注釈書を整理するに先立ち、日蓮聖人の動向や遺文から、『立正安国論』に関連する事項を確認したい。

『立正安国論』は、「災害告発」・「災害対治」・「万民救済」の側面を持っている。日蓮聖人は、生涯にわたつ

て「立正安国」の精神を貫いた。左の表における遺文の引用については、「立正安国論」をキーワードとして該当箇所を列記した。今日の日蓮聖人遺文研究においては、真蹟現存・真蹟曾存・直弟子写本の遺文を用いることとなっている。ただし、本稿において引用する

遺文は、真蹟の有無を問わず、『昭和定本日蓮聖人遺文』（以下、『昭和定本』と略記する）に収録されている真蹟現存・曾存・断片現存・断簡現存・写本現存のすべてを取り上げた。また、（ ）内の頁と遺文の系年は、『昭和定本』に依る。

【日蓮聖人遺文にみる『立正安国論』に関する記述の一覧】

年月日	内容	所蔵
文応元年 七月一六日	『立正安国論』進覽  『安国論副状』 若無 <sup>ハ</sup> 御対治 <sup>ニ</sup> 者為 <sup>ニ</sup> 他国 <sup>ノ</sup> 可 <sup>キ</sup> 被 <sup>レ</sup> 破 <sup>ラ</sup> 此国 <sup>ニ</sup> 惡瑞 <sup>之</sup> 由 <sup>テ</sup> 勘文 <sup>一</sup> 通撰 <sup>レ</sup> 之号 <sup>ニ</sup> 立正安国論 <sup>ト</sup> 正元二年 <sup>本論</sup> 七月十六日 <sup>時辰</sup> 令 <sup>下</sup> 付 <sup>ニ</sup> 宿屋入道 <sup>一</sup> 故最明寺入道殿進 <sup>中</sup> 覽 <sup>之上</sup> （四二二頁）	中山法華経寺  身延山久遠寺 （曾存）
文永五年 四月五日	『安国論御勘由来』 日蓮見 <sup>ニ</sup> 世間体 <sup>一</sup> 粗勘 <sup>ニ</sup> 一切経 <sup>ヲ</sup> 御祈請 <sup>無</sup> 驗 <sup>還</sup> 増 <sup>ニ</sup> 長 <sup>スル</sup> 凶惡 <sup>之</sup> 由 <sup>テ</sup> 道理文証得 <sup>レ</sup> 之了 <sup>ヲ</sup> 。終 <sup>ニ</sup> 無 <sup>ク</sup> 止 <sup>ム</sup> 造 <sup>ニ</sup> 作 <sup>リ</sup> 勘文 <sup>一</sup> 通 <sup>ニ</sup> 其名号 <sup>ヲ</sup> 立正安国論 <sup>ト</sup> 。文応元年 <sup>申庚</sup> 七月十六日 <sup>時辰</sup> 付 <sup>ニ</sup> 屋戸野入道 <sup>一</sup> 奏 <sup>ニ</sup> 進 <sup>シテ</sup> 古最明寺入道殿 <sup>ニ</sup> 了 <sup>ス</sup> 。（四二二～四二二頁）	中山法華経寺

文永五年 八月二日	『宿屋入道許御状』 抑去正嘉元年「八月二十三日戌亥刻大地震。日蓮引諸經勸之念仏宗与禪宗等有二御 帰依之故日本守護諸大善神作二曠患所起災也。若無此对治者為二他国可被破此 国之由。勸文一通撰之。正元二年甲申七月十六日奉付御辺故最明寺入道殿進覽之。 (四二四頁)	日朝写本
文永五年 一〇月一日	『与北条時宗書』 抑正月十八日。西戎大蒙古国牒状到来。「日蓮先年集諸経要文勸之如立正安国論 少不違普合。当三日蓮聖人一分。知未崩之故也。(四二六頁)	京都本満寺(写本)
文永五年 一〇月一日	『与宿屋入道書』 就「先年勸之書安国論普合」令言上候畢。(四二七頁)	京都本満寺(写本)
文永五年 一〇月一日	『与平左衛門尉頼綱書』 抑先年日蓮如立正安国論勸之少不違令普合。(四二八頁)	京都本満寺(写本)
文永五年 一〇月一日	『与北条弥源大書』 抑蒙古国牒状到来事。上自一人下至万民驚動無極。雖然何故人未知之。日蓮 兼而令存知之間既造一論而進覽之。(四二九頁)	京都本満寺(写本)
文永五年 一〇月一日	『与建長寺道隆書』 爰日蓮去文応元年之比勸之書名立正安国論以宿屋入道奉故最明寺殿。(四三〇 頁)	京都本満寺(写本)
文永五年 一〇月一日	『与極楽寺良観書』 日蓮去文応元年之比勸申如立正安国論毫末計不相違之候。(四三二頁)	京都本満寺(写本)

文永五年 一〇月一日	『与大仏殿別当書』 日蓮兼 <sup>レ</sup> 而 <sup>レ</sup> 勘 <sup>レ</sup> 申 <sup>レ</sup> 立 <sup>レ</sup> 正安国論 <sup>ニ</sup> 少 <sup>シ</sup> 不 <sup>レ</sup> 相違 <sup>セ</sup> 。(四三三頁)	京都本満寺(写本)
文永五年 一〇月一日	『与寿福寺書』 然 <sup>レ</sup> 者 <sup>ハ</sup> 先年日蓮如 <sup>ク</sup> 勘 <sup>レ</sup> 書立 <sup>レ</sup> 正安国論 <sup>ノ</sup> 令 <sup>ム</sup> 普 <sup>ク</sup> 合 <sup>セ</sup> 。(四三三頁)	京都本満寺(写本)
文永五年 一〇月一日	『与浄光明寺書』 此事 先年如 <sup>ク</sup> 勘 <sup>レ</sup> 立 <sup>レ</sup> 正安国論 <sup>ニ</sup> 中 <sup>ニ</sup> 少 <sup>シ</sup> 不 <sup>レ</sup> 令 <sup>メ</sup> 相違 <sup>セ</sup> 。(四三四頁)	京都本満寺(写本)
文永五年 一〇月一日	『与多宝寺書』 日蓮奉 <sup>ル</sup> 故最明寺殿 <sup>ニ</sup> 之書 立 <sup>レ</sup> 正安国論御披見候 <sup>カ</sup> 乎。(四三五頁)	京都本満寺(写本)
文永五年 一〇月一日	『与長楽寺書』 既日蓮如 <sup>ク</sup> 勘 <sup>レ</sup> 立 <sup>レ</sup> 正安国論 <sup>ノ</sup> 令 <sup>ム</sup> 普 <sup>ク</sup> 合 <sup>セ</sup> 。(四三六頁)	京都本満寺(写本)
文永六年 一二月八日	『立正安国論』(『昭和定本』二〇九―二二六頁) 執筆 『安国論奥書』 文応元年 <sup>太歲庚申</sup> 勘 <sup>レ</sup> 之。正嘉自 <sup>レ</sup> 始 <sup>メ</sup> 之文応元年 <sup>ニ</sup> 勘 <sup>ル</sup> 畢。去 <sup>ル</sup> 見 <sup>テ</sup> 正嘉元年 <sup>太歲丁巳</sup> 八月廿三日戌亥之魁 <sup>ノ</sup> 大地震 <sup>ニ</sup> 勘 <sup>レ</sup> 之。其後以 <sup>テ</sup> 文応元年 <sup>太歲庚申</sup> 七月十六日 <sup>ヲ</sup> 付 <sup>テ</sup> 宿谷禪門 <sup>ニ</sup> 奉 <sup>ル</sup> 故最明寺入道殿 <sup>ニ</sup> 。(四四二―四四三頁)	中山法華経寺
文永六年	『法門可被申様之事』 日本国には日蓮一人計こそ、世間・出世正直の者にては候へ。其故は故最明寺入道に向て、禪宗は天魔のそい(所為)なるべし。のちに勘文もてこれをつけしむ。日本国の皆人無間地獄に墮べし。これほど有事を正直に申ものは、先代にもありがたくこそ。これをもつて推察あるべし。(四五五頁)	中山法華経寺

文永六年	<p>『故最明寺入道見參御書』 日本国中為令捨舊寺御皈依為三天魔所為之由 故最明寺入道殿見參之時申之。又立正安国論擧之。(四五六頁)</p>	能登滝谷妙成寺
文永八年 九月一二日	松葉ヶ谷で捕らえられる(龍口法難) 【三度の高名】の二度目】	
文永一〇年 八月三日	<p>『波木井三郎殿御返事』 如経文者流罪日蓮国土滅亡先兆也。其上御勘氣已前其由勘出之。所謂立正安国論是也。誰疑之。以之為歎。(七四七頁)</p>	重須本門寺(日興写本)
文永一〇年	<p>『呵責謗法滅罪抄』 正嘉の大地震等の事は、去る文応元年(隆慶)七月十六日宿屋の入道に付て、故最明寺入道殿へ所奉勸文立正安国論には、法然が選択に付て日本国の仏法を失ふ故に、天地曠をなし、自界叛逆難と他国侵逼難起るべしと勸へたり。(七八六頁)</p>	京都本満寺(写本)
文永一一年 四月八日	平左衛門尉頼綱に對面 【三度の高名】の三度目】	
文永一一年 一二月一五日	<p>『顕立正意抄』 日蓮去正嘉元年(隆慶)八月二十三日見大地震勸定之書立正安国論云薬師經七難内五難忽起二難猶殘。所以他国侵逼難・自界叛逆難也。(八四〇頁)</p>	岡宮光長寺(日春写本)
建治元年 四月	<p>『法蓮抄』 抑正嘉の大地震・文永の大彗星を見て、自他の叛逆我朝に法華經を失故としらせ給ゆへ如何。(中略)当レ知、自レ是大事なる事の一閻浮提の内に出現すべきなりと勸て、立正安国論を造て最明寺入道殿に奉る。彼状云、<small>註取</small>此大瑞は他国より此国をほろぼすべき先兆也。禅宗・念仏宗等が法華經を失故也。(九五四頁)</p>	身延山久遠寺(會存)
建治元年		

<p>建治元年</p>	<p>『種種御振舞御書』      ①去、文永五年後正月十八日、西戎大蒙古国より日本国ををそ（襲）うべきよし牒状をわ      たす。日蓮が去、文応元年<small>庚申</small>に勘へたりし立正安国論すこしもたがわず符合しぬ。此書は      白樂天が楽府にも越へ、仏の未來記にもをとらず。末代の不思議な事かこれにすぎん。      （九五九頁）      ②平左衛門既に日本の柱をたをしぬ。只今世<small>乱</small>して、それともなくゆめ（夢）の如<small>う</small>に妄語      出来して、此御一門どしうち（同士討）して、後には他国よりせめらるべし。倒せば立      正安国論に委しきのごとし。（九七六頁）</p>	<p>身延山久遠寺      （曾存）</p>
<p>建治元年      六月</p>	<p>『撰時抄』      去し文応元年<small>庚申</small>七月十六日に立正安国論を最明寺殿に奏したてまつりし時、宿谷の入道      に向云、禅宗と念仏宗とを失給べしと申させ給へ。この事を御用なきならば、此一門よ      り事をこりて、他国にせめられさせ給べし。（一〇五三頁）</p>	<p>玉澤妙法華寺、      他四ヶ所</p>
<p>建治元年      九月三日</p>	<p>『阿仏房尼御前御返事』      但し謗法に至て浅深あるべし。偽り愚かにしてせめざる時もあるべし。真言・天台宗等      は法華誹謗の者、いたう呵責すべし。然れども大智慧の者ならでは日蓮が弘通の法門分      別しがたし。然間、まづまづさしをく事あるなり。立正安国論の如し。（一一〇九頁）</p>	<p>日朝写本</p>
<p>建治二年      正月一日</p>	<p>『清澄寺大衆中』      正嘉・文永の大地震大長星を見て勘云、我朝に二の大難あるべし。所謂自界叛逆難・他      国侵逼難也。自界は鎌倉に権の大夫殿御子孫どしうち（同士打）出来すべし。他国侵逼      難は四方よりあるべし。其中に西よりつよくせむべし。是偏に仏法が一国拏て邪なるゆ      へに、梵天帝釈の他国に仰つけてせめらるるなるべし。日蓮をだに用ぬ程ならば、將門・      純友・貞任・利仁・田村のやうなる將軍百千人ありとも叶ふべからず。これまことな      らずば、真言と念仏等の僻見をば信ずべしと申ひろめ候き。（一一三四頁）</p>	<p>身延山久遠寺      （曾存）</p>

<p>建治三年 六月</p>	<p>『下山御消息』 天神は眼を瞋して此国を睨め、地神は憤を含で身を震ふ。長星は一天に覆ひ、地震は四海を動す。余此等の災天に驚て、ほほ内典五千外典三千等を引見に、先代にも希なる天変地天也。然而儒者家には記せざれば知事なし。仏法は自迷なればこゝろへず。此災天は常の政道の相違と世間の壊誤より出来せるにあらず。定て仏法より事起るかど勤へなしぬ。先大地震に付て、去正嘉元年に書を一巻注たりしを、故最明寺の入道殿に奉る。(一三三〇頁)</p>	<p>小湊誕生寺、他二九ヶ所</p>
<p>建治弘安の交</p>	<p>『立正安国論』〈広本〉〔昭和定本〕一四五五―一四七八頁〕執筆 『妙法比丘尼御返事』 今日日本国すでに大謗法の国となりて、他国にやぶらるべしと見えたり。此を知らずば、縦ひ現在は安穩なりとも後生には無間大城に墮べし。後生を恐て申ならば、流罪死罪は一定なりと思定て、去文応の比、故最明寺入道殿に申上ぬ。(一五六一頁)</p>	<p>日朝写本</p>
<p>弘安元年 九月六日</p>	<p>『本尊問答抄』 如し是仏法の邪正乱しかば王法も漸く尽ぬ。結句は此国他国にやぶられて亡国となるべきなり。此事日蓮独勤へ知れる故に、仏法のため王法のため、諸経の要文を集て一巻の書を作る。仍故最明寺入道殿に奉る。立正安国論と名けき。(一五八二頁)</p>	<p>日興写本</p>
<p>弘安二年 一〇月</p>	<p>『瀧泉寺申状』 此條日弁等之本師 日蓮聖人親見去正嘉以来大仏星 大地動等一切経云当時日本国之為レ体執著權小一失没 実経之故当起三前代未有之二難。所謂自界叛逆難・他国侵逼難也。仍思ニ治国之故ニ兼日可レ被レ対ニ治彼大災難ニ之由 去文応年中上三表一巻書一引別出。所ニ勤申ニ皆以符合。既同ニ金口未來記。宛如ニ声与響。(二六七七―二六七八頁)</p>	<p>中山法華経寺</p>



弘安二年 一月三〇日	『中興入道御消息』 去正嘉年中の大地震、文永元年の大長星の時、内外の智人其故をうらなひ（占考）しかも、なへのゆへいかなる事の出来すべしと申事をしらざりしに、日蓮一切経蔵に入て勘へたるに、真言・禅宗・念仏・律等の権小の人々をもつて法華経をかるしめたてまつる故に、梵天・帝釈の御とがめにて、西なる国に仰付て、日本国をせむべしとかがんがへて、故最明寺入道殿にまいらせ候き。（一七二六～一七二七頁）	平賀本土寺（写本）
弘安三年 一二月一八日	『智妙房御返事』 日蓮此二十八年が間、今此三界の文を引て此迷をしめせば、信ぜずばさてこそ有るべきに、い（射）つ、き（切）つ、ころしつ、ながしつ、をう（逐）ゆへに、八幡大菩薩宅をやいてこそ天へはのぼり給ぬらめ。日蓮がかんがへて候し立正安国論此なり。（一八二七頁）	中山法華経寺
弘安五年 一〇月七日	『波木井殿御書』 浄土宗の無間大阿鼻地獄に墮べき由、其外余宗皆地獄に可墮由一に記し、立正安国論を作り、宿屋の禪門を使として奉入最明寺殿見参。此は生年三十九の文応元年庚申也。（二九二六～二九二七頁）	京都本満寺（写本）
弘安五年七月	『法華本門宗要鈔』下巻 文応元年庚申制作立正安国論一卷属宿谷入道令入最明寺殿之見参。（二二六〇頁）	三寶寺（写本）
弘安五年 一〇月三日	『日朗御讓状』 立正安国論一卷 御免状（二二八五頁）	

### 三、『立正安国論』注釈書に関する先行研究

『立正安国論』注釈書の研究史に対する先行研究として、次の四点が挙げられる。

①鈴木一成著『日蓮聖人御遺文講義』第一卷（昭和七年初版・龍吟社）五三～五六頁

『日蓮聖人御遺文講義』は、全一八巻と索引から構成され昭和七〇～一一年に龍吟社より刊行された。その後、日蓮聖人遺文研究会や日本仏書刊行会等から再版が発行されている。第一巻には、『立正安国論』、『安国論御勘由来』、『宿屋入道許御状』、『十一通御書』（与北条時宗書）、『与宿屋左衛門光則書』、『与平左衛門尉頼綱書』、『与北条弥源太書』、『与建長寺道隆書』、『与極楽寺良観書』、『与大仏殿別当書』、『与寿福寺書』、『与浄光明寺書』、『与多宝寺書』、『与長楽寺書』、『弟子檀那中御書』、『安国論奥書』、『一昨日御書』、『顕立正意鈔』の講義が収録されている。

『立正安国論』の注釈書として、六老僧の一人である日興が執筆した『安国論大意問答』（正本、富士大石寺）にはじまり、玉牙院日人が執筆した『安国論和註』まで、四三点の注釈書が収録されている。この四三点

のうち、近現代において発刊された注釈書は、玉牙院日人著『安国論和註』の一点のみであり、本稿に収録している。

②北尾日大著『日蓮聖人遺文全集講義』第四卷（昭和七年初版・大輪閣）一九～二二頁

『日蓮聖人遺文全集講義』は、昭和九〇～一七年に大輪閣より全二九巻として発刊され、その後に復刻版として昭和六〇年にピタカから全二八巻として発刊した。第四巻には、『立正安国論』のみの講義が収録されている。

『立正安国論』の注釈書は、身延山久遠寺一一世の行学院日朝が執筆した『立正安国論見聞』より、清水龍山が執筆した『立正安国論講義』（昭和九年初版・大蔵経講座収録）までの三九点が含まれている。この三九点のうち、近現代における注釈書は、谷海淑註訳『立正安国論和註』より、清水龍山著『立正安国論講義』までの二三点である。しかし、この二三点には、影印版遺文集や真蹟対照を目的とした活字版遺文集も含まれており、本稿にはそれらから二二点を収録している。

③小松邦彰講述『立正安国論』はいかに読まれてきたか（日蓮宗新聞社編『連続講座記録』『立正安国論』を

いかに読むか』(平成二〇年・日蓮宗東京西部教化センター)資料二九〇～二九一頁収録)

伊藤瑞叡・庵谷行亨・北川前肇・今成元昭・小松邦彰・小野文琬・中尾堯文の七氏による講義録が収録されている。『立正安国論』奏進七五〇年を翌年に迎えるにあたって、連続講義が企画された。

小松氏の講義資料には、『立正安国論』注釈書として、行学院日朝が執筆し、文明十一年(一四七九)に刊行された『安国論私抄』にはじまり、北川前肇・原愼定編著『傍訳 日蓮聖人御遺文 立正安国論』までの二七点が収録されている。この二七点のうち、近現代における注釈書は、谷海淑註訳『立正安国論和註』より、北川前肇・原愼定編著『傍訳 日蓮聖人御遺文 立正安国論』までの一六点であり、いずれも本稿に収録している。

④小松邦彰稿「近代日蓮教学と『立正安国論』」(平成二二年・『福神』一四号所収)

谷海淑註訳『立正安国論和註』より、佐藤弘夫註訳『日蓮』『立正安国論』全訳』までの一七点が収録されており、これらはすべて近現代に発刊された文献のため、すべて本稿にて収録している。

管見の限り、三氏による四点の先行研究が確認できた。

#### 四、近現代の日蓮宗教学史にみる『立正安国論』注釈書

前項にて確認した先行研究を礎として、近現代における『立正安国論』注釈書の目録を作成し、あわせて所在や書誌的事情の確認作業をおこなう。そのうえで、今後に進める『立正安国論』注釈書の比較・検討をするための前提作業としたい。

##### 【凡例】

・本編は、『立正安国論』の全文を注釈することを目的とする文献を中心に、『立正安国論』に関連する文献を集成した。本編において、漏れた文献については、関係諸賢の御教示を得て、将来的に補訂することとしたい。

・本編は、『立正安国論』の全文を注釈することを目的とする文献、または、それに準ずると思われる文献、あるいは、『立正安国論』研究史の考察において必要と判断した文献を採録した。

・編著者の表記について、同一人物であるも、標題紙

と奥付に相違がある場合、はじめに表紙あるいは標題紙に表記されている人名を記し、( ) 内には奥付に記されている編著者を記した。ただし、旧字体を新字体に改めた場合もある。

・出版年は、いずれも初版の発行年による。

・本目録に取り上げる注釈書は、「立正大学蔵書検索(OPAC)」および「国立国会図書館サーチ」において、確認できる文献のみとして、検索機能において該当せぬ文献は含まないこととする。

・所在は、平成二五年(二〇一三) 一月三十一日時点とする。

立正大学情報メディアセンター(大崎図書館)を所

【近現代日蓮宗教学史にみる『立正安国論』注釈書の目録】  
明治期 六点

在の第一として、本稿では他の所蔵を明記していないが、将来的には四ヶ所の所在場所を対象として、注釈書所在の有無をまとめていきたいと考えている。初版本の所蔵場所を明記しているが、初版が確認できない場合は備考欄に記入してある版を対象とした。所在の記号

○……立正大学情報メディアセンター(大崎図書館)所蔵の注釈書

△……立正大学情報メディアセンター(熊谷図書館)所蔵の注釈書

☆……立正大学日蓮教学研究所所蔵の注釈書

□……国立国会図書館所蔵の注釈書

書名	編著者	発行年	発行社(者)	所在	備考
立正安国論和註(和注)	谷海淑	二三〜二四年	北畠茂兵衛	○	全三巻
訓訳読本立正安国論	田中智学(巴之助)	二七年	立正安国会大阪布教所	○	
立正安国論活用篇	黒澤一郎	二八年	矢島嘉平次	□	

大正期 一一点

書名	編著者	発行年	発行社	所在	備考
立正安国論講義	了義日達	二年	平楽寺書店	○	三版(一〇年)
立正安国論略解	柴田一能	四年	日月社	○	
立正安国論新釈	長滝智大	五年	新潮社	○	四版(六年)
日蓮聖人聖訓要義 二卷	本多日生	八年	大鏡閣	○	
意識立正安国論	田辺善知	一〇年	安国論寺	○	
原文対照口語訳日蓮聖人全集 一卷	清水龍山	一〇年	隆文館	○	全七卷
通俗講話 立正安国論 日蓮上人の大奮闘	中村素山	一一年	心友社	○	
新撰立正安国論講義	北尾日大(啓玉)	一一年	新光社	○	
立正安国論要解	小林一郎	一三年	地涌学会出版部	□	○・五版(一三年)
日蓮聖人遺文研究 一卷 附録	山川智心(伝之助)	一四年	天業民報社	○	
立正安国論通釈	田辺善知	一五年	平楽寺書店	○	

立正安国論宝鑑	河合日辰	二九年	三倉文林堂	□	
立正安国論集註	森川寛行	三〇年	森川寛行	□	
立正安国	小笠原長生	四三年	天鼓社	○	

昭和期 四〇点

書名	編著者	発行年	発行社	所在	備考
立正安国論精釈	三谷六郎	四年	弾正社	○	
立正安国論講要	清水龍山	七年	清明文庫	○	
日蓮聖人五大部提要 立正安国論	中川日史	七年	研文館	○	三版(八年)
日蓮聖人遺文講義 一卷	鈴木一成	七年	龍吟社	○	全一九卷
日蓮聖人遺文全集講義 四卷	北尾日大	七年	大林閣	○	全二九卷
日蓮聖人御書五大部提要 上卷	中川日史	七年	不明	○ <sup>④</sup>	全二卷 ○・新組改版 (平成二三年)
立正安国論講義	清水龍山	九年	東方書院	○	
日蓮主義新講座	保坂智宇	九年～一〇年	師子王文庫	○	全二二卷 〔連載〕
日蓮上人遺文大講座 一卷	小林一郎	一一年	平凡社	○	全二二卷
立正安国論	田中謙周 <sup>③</sup>	一一年	日蓮宗布教助成会	□	
立正安国論要解	五十嵐要諦	一一年	高崎八品講	□	
日蓮主義大講座	保坂智宇	一一年	アトリエ社	○	全二二卷 〔連載〕
国訳一切経 諸宗部二十五	岩野真雄(茂田井教 亨訳)	一四年	大東出版社	○	全二五五卷

立正安国論講義	北尾日大	一六年	平楽寺書店	□	
立正安国論と教育	小林一郎	一七年	小学館	○	
立正安国論通釈	小林一郎	一七年	慈念会	□	
立正安国論の文体の研究	田中喜久三	一七年	平楽寺書店	○	
日蓮大聖人御書十大部講義 一卷	戸田城聖	二九年	創価学会	□	○・再版(三六年)
現代語訳 立正安国論	星野武男	三四年	真世界社	○	
古典日本文学全集15 仏教文学集	堀一郎	三六年	筑摩書房	○	全三六卷
日蓮聖人御遺文 六大部疏	井上清純	三九年	誠文堂新光社	○	
日本古典文学大系82 親鸞集・日蓮集	兜木正亨・新聞進一	三九年	岩波書店	○	全一〇〇卷
日蓮聖人御真蹟 立正安国論 訓読解説	日蓮聖人遺文研究会	四〇年	日本仏書刊行会	○	
日蓮大聖人御書十大部講義 一卷	池田大作	四一年	創価学会	○	
予言者の仏教 立正安国論	田村芳朗	四二年	筑摩書房	○	
日蓮聖人遺文講座 五卷	田中応舟	四三年	本聖堂	○	全一〇卷 <sup>6)</sup>
日本の名著8 日蓮	紀野一義	四五年	中央公論社	△	全五〇卷
立正安国論	創価学会教学部	四六年	聖教新聞社	□	
日本の古典12 親鸞・道元・日蓮	木下順二	四八年	河出書房新社	□	全二五卷

書名	編著者	発行年	発行社	所在	備考
立正安国論を現代に読む	伊藤瑞毅	元年	展転社	○	
池田大作全集 25・26	池田大作	元～二年	聖教新聞社	□	全一四九卷
立正安国論総釈	山川智心	二年	浄妙全書刊行会	○	
日蓮聖人全集 一卷	小松邦彰	四年	春秋社	○	全七卷

平成期 二七点

日蓮 立正安国論 付観心本尊抄	田村完誓	四八年	徳間書店	○	
立正安国論文段	創価学会教学部	四九年	聖教新聞社	□	
古典を訳す	木下順二	五三年	福音館書店	○	
立正安国論講義	池田大作	五三～五四年	聖教新聞社	□	全五卷
日蓮と『立正安国論』	佐々木馨	五四年	評論社	☆	
少年版日蓮大聖人御書 立正安国論	創価学会教学部	五六年	聖教新聞社	□	
立正安国論講話解説書	茂田井教亨	五九年	法経教育開発	○	
戸田城聖全集 五卷	戸田城聖	六〇年	聖教新聞社	□	
御真筆対照 立正安国論	京都日蓮宗青年会	六二年	京都日蓮宗青年会	○	
立正安国論謹講	浅井昭衛	六三年	日蓮正宗顕正会	□	
日本の仏典9 日蓮	渡辺宝陽・小松邦彰	六三年	筑摩書房	○	全一〇卷



大乘仏典24 日蓮	藤井日達全集 一卷 立正安国論	藤井日達	六年	隆文館	○	全一〇巻
立正安国論に聞く	立正安国論に聞く	北川前肇	七年	本門法華宗学院	○	
『立正安国論』入門	『立正安国論』入門	関戸堯海	七年	山喜房仏書林	○	
日蓮立正安国論ほか	日蓮立正安国論ほか	紀野一義	一三年	中央公論新社	○	
立正安国論	立正安国論	齋藤信雄	一四年	まどか出版	○	
傍註 立正安国論通解	傍註 立正安国論通解	河村孝照	一五年	山喜房仏書林	○	
やさしい現代語訳立正安国論	やさしい現代語訳立正安国論	田中日常	一五年	国書刊行会	○	
傍訳 日蓮聖人御遺文 立正安国論	傍訳 日蓮聖人御遺文 立正安国論	北川前肇・原愼定	一六年	四季社	○	
現代に『立正安国論』を読む	現代に『立正安国論』を読む	功刀貞如	一七年	知人館	○	
読み解く『立正安国論』	読み解く『立正安国論』	中尾堯	二〇年	臨川書店	○	
『立正安国論』をいかに読むか	『立正安国論』をいかに読むか	日蓮宗新聞社	二〇年	日蓮宗東京西部教化センター	○	
日蓮『立正安国論』全訳注	日蓮『立正安国論』全訳注	佐藤弘夫	二〇年	講談社	○	
『立正安国論』転読会ノート	『立正安国論』転読会ノート	日蓮宗東京都南部布教師会	二〇年	日蓮宗東京都南部布教師会	○	
『立正安国論』を読む	『立正安国論』を読む	北川前肇	二一年	日蓮宗新聞社	○	
名句で読む『立正安国論』	名句で読む『立正安国論』	中尾堯	二一年	日蓮宗新聞社	○	

「立正安国論」について	福島正堯	二二年	大阪日蓮宗青年会	○	
御真蹟対照 立正安国論 並御指南抄	菅野道渉	二二年	大日蓮出版	○	
立正安国論評考	後城良謙	二二年	後藤良謙	□	
今日の『立正安国論』を考える	原井慈鳳	二二年	法華宗（本門流） 妙泉寺	□	
日蓮「立正安国論」「開目抄」	小松邦彰	二二年	角川学芸出版	☆	
立正安国論ノート	京都日蓮宗青年会	二二年	東方出版	○	
日蓮が語る現代の「立正安国論」	大川隆法	二四年	幸福の科学出版	□	

管見の限りで、明治期に六点、大正期に二一点、昭和期に四〇点、平成期に二七点、あわせて八四点の注釈書および関連の文献が確認できた。先にも述べたとおり、日蓮宗教学史においては、数多くの『立正安国論』注釈書が執筆・発刊されている。また、「文学」や「古典」という分野からも、研究の対象とされており、重要視されている。つまり、編著者の立場が日蓮聖人門下の僧俗に限定されず、幅広く研究されていることのであらわれである。

本編の調査中、先に挙げた先行研究から発刊が明らか

かであるも、目録作成の過程において原本を筆者未見との理由から本稿所収の目録からは割愛し、次に列記するにとどめたい。

①藤井行勝『立正安国論要旨』<sup>7)</sup>

②長橋啓禎『稽首立正安国論』<sup>8)</sup>

これらを再調査すると共に、更に幅広い視点から『立正安国論』の注釈書を考察していきたい。

## 五、むすびに

本稿では、近現代の日蓮宗教学史における『立正安

国論』注釈書の所在確認と目録の作成にとどまった。しかし、これから進める注釈書の比較や検討をする前提として、必要な作業であると確信している。これらをつまえて、近現代における日蓮聖人門下が、『立正安国論』をどのように受容し、また展開したかについて考察を進めていきたい。そして、『立正安国論』研究史に対する一側面を確認したいと考えている。

また本稿では、注釈書のみを取り上げたが、同様の方法を用いて、『立正安国論』に関する研究論文・記事・講義録等の目録も作成し、考察を進めていきたい。

## 註

- (1) 『昭和定本』四四二頁
- (2) 『昭和定本』二〇九頁
- (3) 北尾日大著『日蓮聖人遺文全集講義』第四卷(一九頁)に、「本書の註釈書は遺文全集中一番多く、著書論文無慮百に達せんとしてゐる」とある。
- (4) 「立正大学蔵書検索(OPAC)」・「国立国会図書館サーチ」で検索したが、該当資料は得られなかった。
- (5) 「国立国会図書館サーチ」では、著述者の名称による検索では該当せぬも、奥付の確認によって執筆者の判断で著者を書き加えた。

(6) 六巻に、全一〇巻との表記があるが、今回は七巻まで確認できた。

(7) 北尾日大著『日蓮聖人遺文全集講義』第四巻に所収の『立正安国論』注釈書目録に収録されている。

(8) 右同

## (附記)

本稿所収の『立正安国論』注釈書の目録を作成するにあたって、立正大学情報メディアセンター大崎学術情報サービス課・水上裕子氏より御教示をたまわった。また、情報メディアセンターの関係者にも、種々の御協力をいただいた。末筆ながら、関係各位に対して、厚く感謝申し上げる次第である。